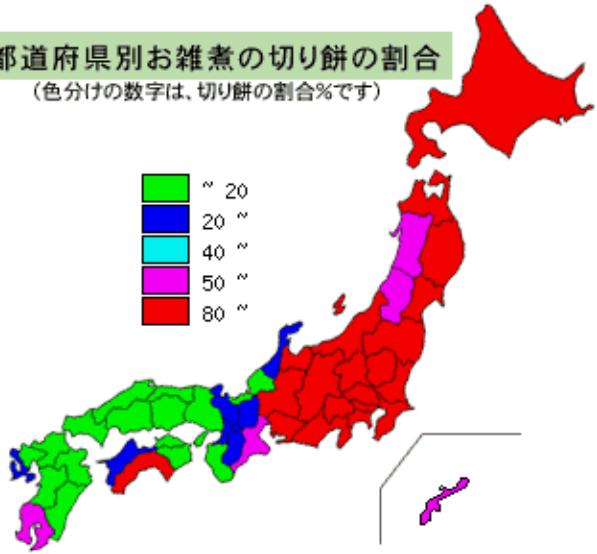
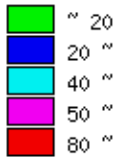


都道府県別お雑煮の切り餅の割合

(色分けの数字は、切り餅の割合%です)



日本の中の北陸地方

—西日本と東日本—



「イモ」から見た地域性

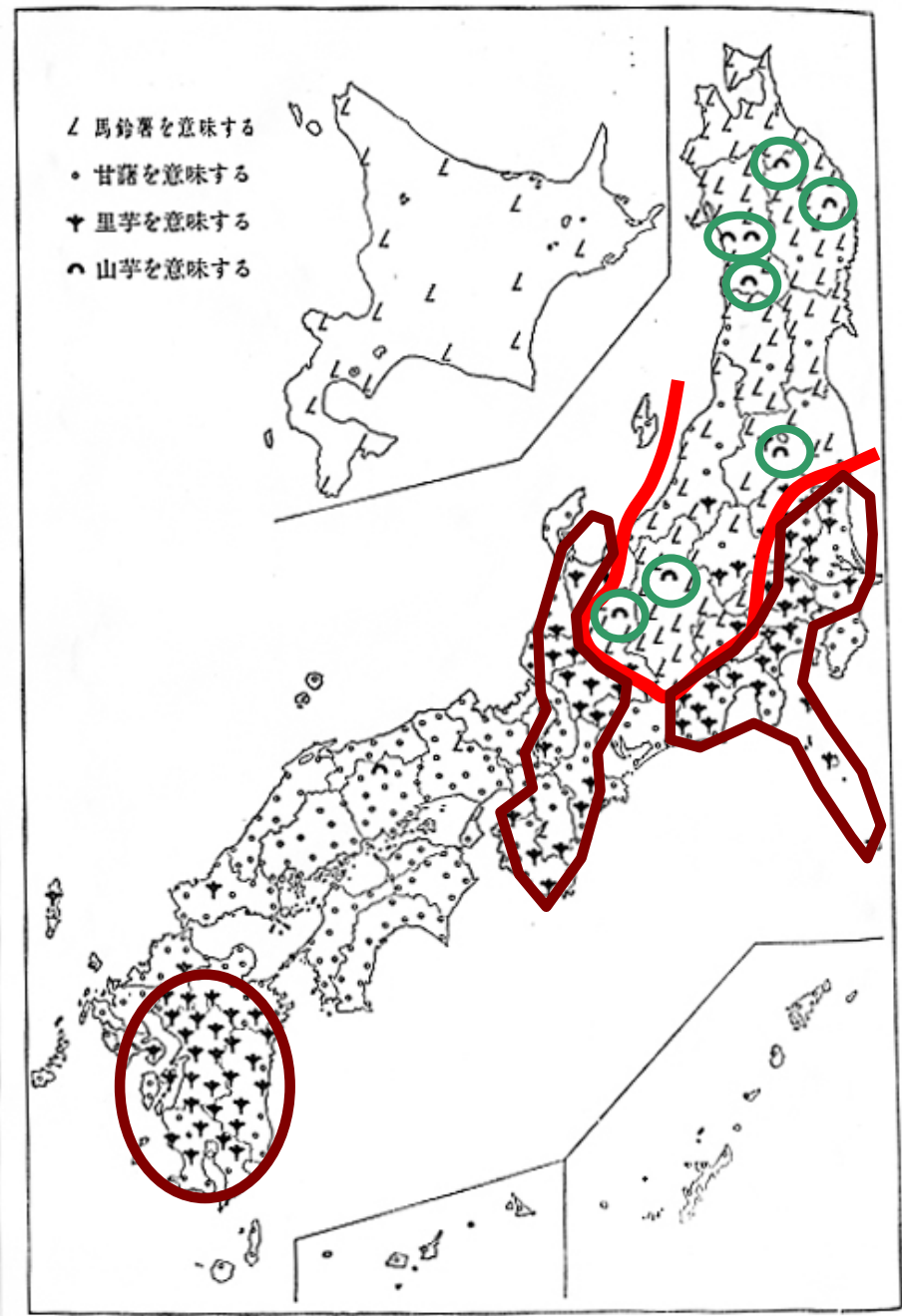
- 「イモ」といったら「何イモ」を想像するか？
- 「サツマイモ」「ジャガイモ」が圧倒的に多い
- 「サトイモ」「ヤマイモ」を挙げることもある

「イモ」は「イモ」でも・・・

- 西日本は「甘藷＝サツマイモ」、東北日本は「馬鈴薯＝ジャガイモ」が卓越。
 - サツマイモは熱帯系作物
 - ジャガイモは寒帯系作物

- 「里芋」「山芋」を挙げる地域もある。
 - サトイモは熱帯系作物
 - ヤマイモは寒地にも適応

- 食糧としてのイモの分布が場所によって異なっており、東西に分かれた分布になっている。





言語の分布から環境を考える

■ 言語地理学 という分野

- 「言語」の地域的広がりを考えたり，その広がりを基に様々な現象を考える学問分野.
- 言語学の分野，地理学の分野で扱っている.

■ 「ことば」の分布はどうなっているのだろうか？

- 言語の分布は文化圏を示す．同じ言葉を使う人たちは情報を共有できる.
- 環境と言語の間には関係があるだろうか？

「東西性」 を持つ言葉①

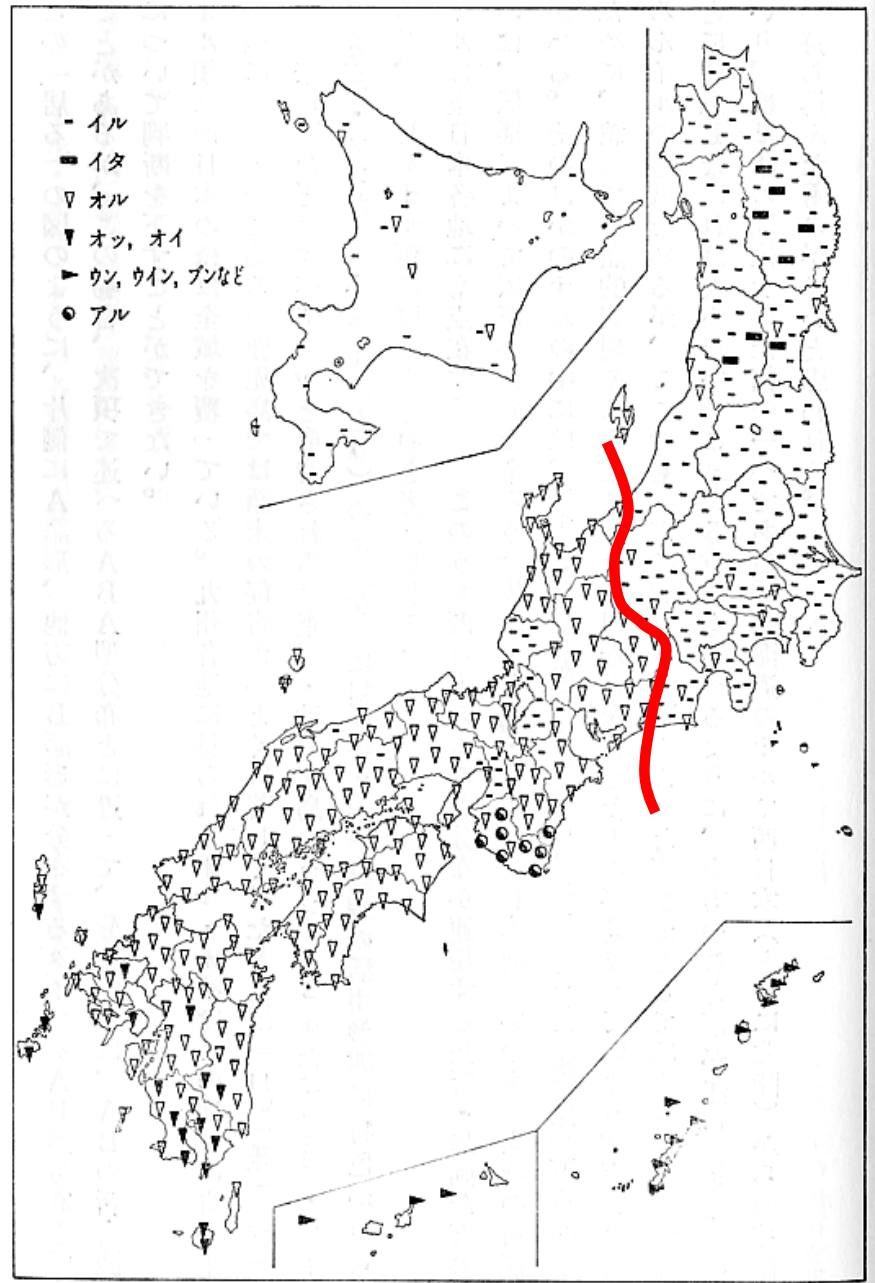
■ 人の状態を示す基本的な用語

- むこうに人が「イル」
- むこうに人が「オル」

■ 新潟－長野－静岡を結ぶラインを境界線に、

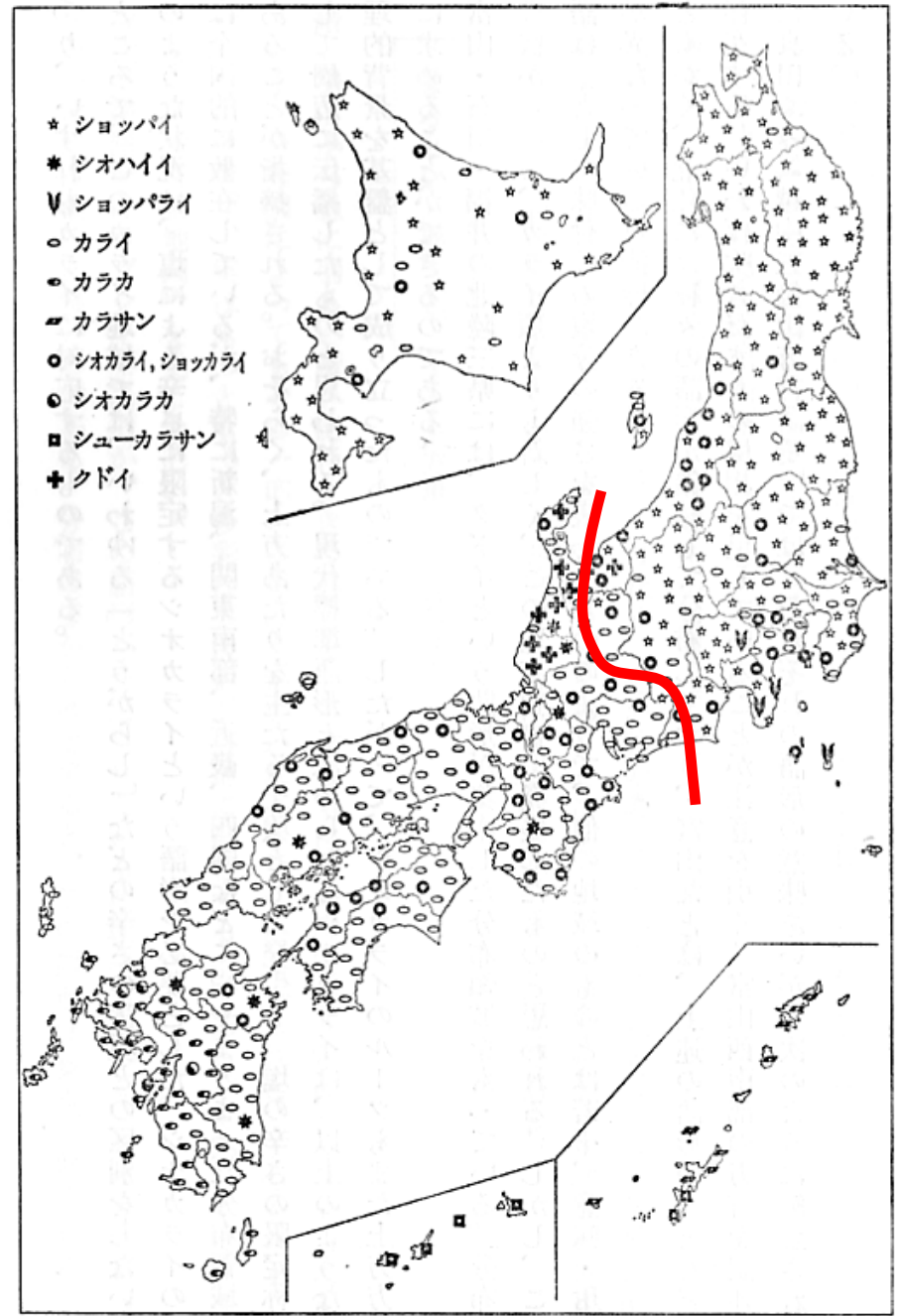
- 西日本で「オル」
- 東日本で「イル」

居る



「東西性」を持つ言葉②

- 塩の味は？
- 西日本 = 「カライ」
- 東日本 = 「シヨツパイ」





「東西性」を持つ言葉③

	東日本	西日本
動詞の命令形	「ミロ」	「ミヨ」
動詞の音便形	「ハラッタ」	「ハロータ」
形容詞の音便形	「ヒロクナル」	「ヒーローナル」
否定の助動詞	「シナイ」	「セヌ・セン」
断定の助動詞	「ダ」	「ヤ」



言語の東西性が意味するモノ

- **古くから存在する基本単語**
 - 状態を指す「イル・オル」
 - 生きていく上で欠かすことのできない「塩」
- **言語の基本となる文法**
- **基本的な言葉に東西性が存在する**
- **言語の分布は文化圏を表すので、古い言葉、基本的な言語に東西性が認められるということは、古い時代の日本に「文化の東西性」があったコトを意味する。**



日本を代表する食事とは？

- **食事は人間が生きていく上で欠かせないモノ**
 - →文化性を強く反映する。

- **「日本全体」を代表する食事とはなんだろうか？**
 - 寿司・刺身は日本らしい食事だろうか？
 - お茶も日本を代表できるだろうか？
 - ソバはどうだろうか？

寿司

- にぎりずしは、江戸時代以降のお寿司，もともとは「なれ寿司」
- 魚を保存するための技術として発達。気温が高く，魚の保存が難しい西日本中心の食品。



年取り魚・・・おせち料理

■ 西日本＝ブリ <暖流系>

- 北海道付近が北限。南シナ海で産卵
- 食べ頃になるのは北陸以南
- 石川県の年取り魚
 - 年末の近江町市場を見に行くと「年賀」と書いてあるブリが・・・

■ 東日本＝サケ・マス <寒流系>

- 北太平洋を回遊
- 現在は石川県が南限
 - そろそろ手取川にサケが昇ってくる頃。興味がある人は美川の水産試験場に見に行ってみて。
 - しかし、石川県ではほとんどサケを食べない

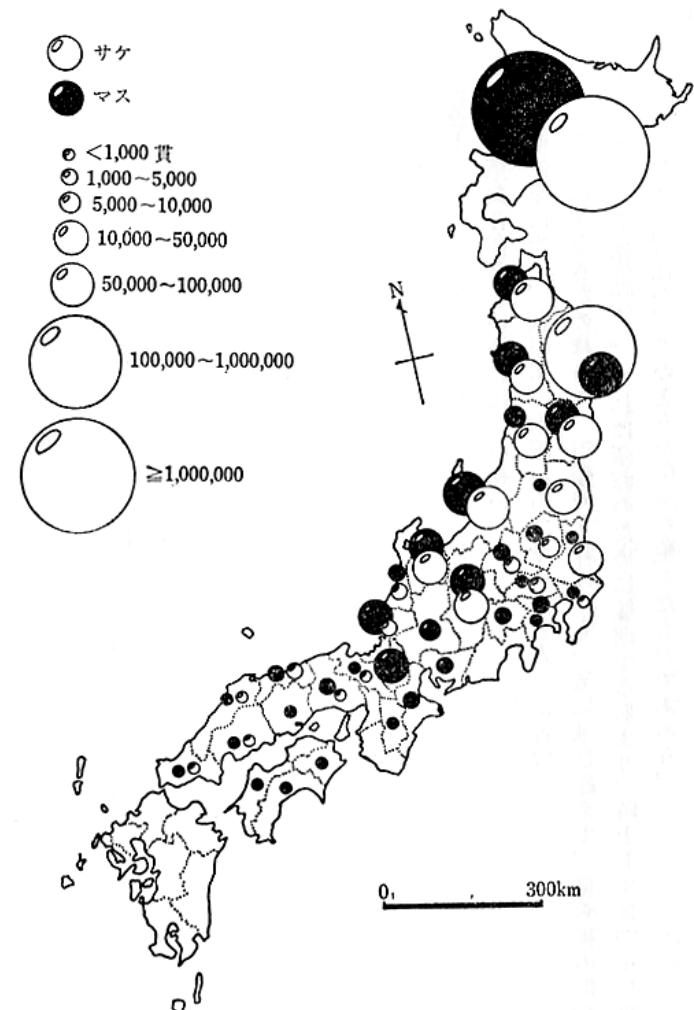


図5 昭和初期における道府県別サケ・マス漁獲量 (昭和8年) (農林省水産統計により作成)

うどん・ソバは？

■ 西日本＝うどん

- 小麦が原料
- 立ち食いうどん屋、きしめん屋

■ 東日本＝そば

- そばの実が原料
- 立ち食いそば屋

■ そばと小麦のとれる場所

- 小麦：米の裏作として冬場に栽培。暖かい冬
- そば：夏の日照が少なく寒い地域でも栽培が可能



茶は？

- 西日本と東日本での緑茶の消費量は大きく異なる。
- お茶の栽培が経済的にペイできるのは茨城～新潟を結ぶ線より南
 - 宇治、狭山などの名産地はこの線以南にある
- 「お茶を飲む」という文化も西日本中心の文化
 - なぜか？

表16 緑茶の年間消費量の順位

	昭55	昭56	昭57
1	静岡	静岡	松江
2	松江	松江	静岡
3	秋田	新潟	秋田
4	前橋	仙台	京都
5	東京	横浜	横浜
6	甲府	京都	富山
7	京都	千葉	福井
8	佐賀	前橋	甲府
9	川崎	富山	大津
10	新潟	秋田	金沢
東*	1	1	1
西	9	9	9

* 茨城～新潟を東西の分岐点とした分類
(内閣総理府統計 家計調査から)

お茶の木

- お茶の木は常緑広葉樹
- 原産地の雲南省ではお茶の巨木がある
- 日本の茶畑では扇風機を回す
 - 放射冷却による接地逆転層によってダメージを受けることを避けるために空気を攪拌する。
 - 元来、暑いところの木なので、寒い所では生育できない。
 - 日本では西日本でしか十分に生育できない。



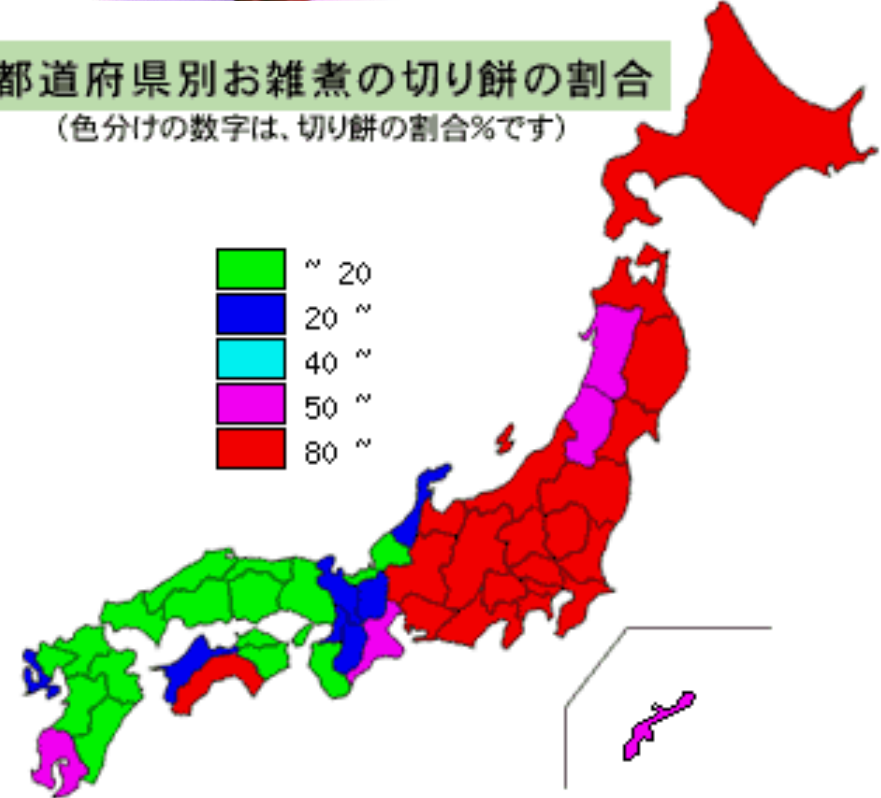
丸モチと角モチ

- 角モチは伸しモチを切ったもの
- 丸モチはいちいち丸める必要がある→面倒．．．
 - 角モチは切った断面からかびやすい
 - カビが発生しやすい高温多湿地域では手間を掛けても丸める必要がある
 - 高温多湿な西日本は丸モチにする必然性がある



都道府県別お雑煮の切り餅の割合

(色分けの数字は、切り餅の割合%です)



西日本に丸モチ文化圏が広がっている



日本らしさの「東西性」

- 言語・食事といった文化の根本的なモノの中に，日本列島の「東西性」が隠されている＝「日本」とはなにか？
- 異なるモノを食べ，異なる言葉を喋る，異なる文化集団が西日本と東日本に存在していた可能性。

- 「東西性」を成立させた環境的要因はなにか？
- 「東西性」の基となった文化集団とはなにか？

アリソフの区分による日本の気候

- **南西日本：4帯 (TP)**
夏は熱帯気団，冬は寒帯気団に覆われる。
- **東北日本：5帯 (PP)**
一年中，寒帯気団に覆われる。
- 南西日本は夏の間，高温（多湿）の気団（熱帯気団）に覆われ，気温が高くなるのに対し，東北日本では夏涼しいままで推移する。
- 南東北が境界地帯
 - **北陸は4帯の北限地帯**

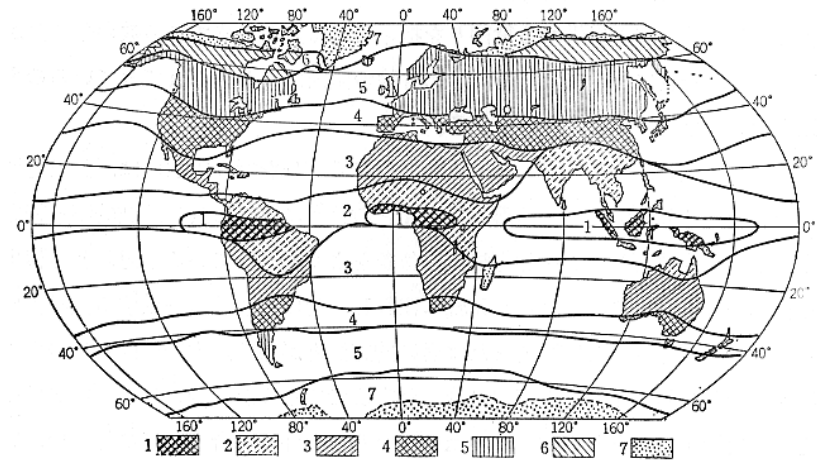
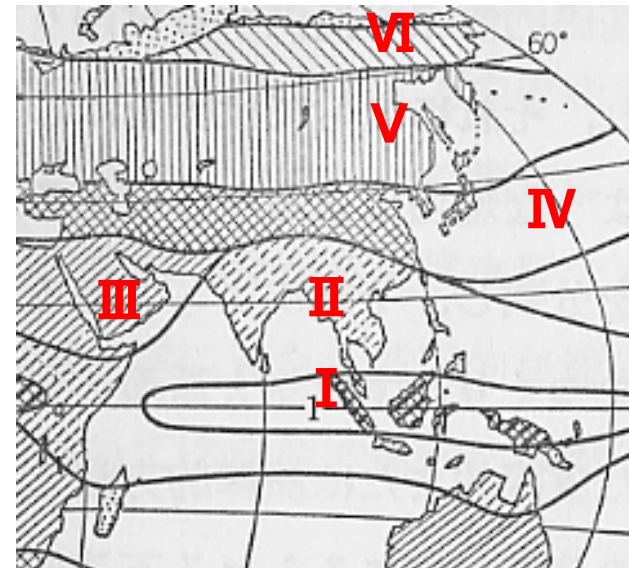


図21 アリソフの気候区分 (Flohn, 1957より)



日本列島の植生

- 南西日本 = **照葉樹林**
 - シイ・カシ・タブ・クスノキ
- 東北日本 = **落葉広葉樹林**
 - **ブナ**・ミズナラ



鹿児島県 金峰山の照葉樹林

青森県 白神山地のブナ林



照葉樹

- **常緑広葉樹の一種。熱帯林と近い性質**
 - 夏冬通して気温が高いため、一年中光合成を行うことができる場合、冬の間も葉を付けていた方が生存戦略上有利になる。
 - 日本列島を北限として、朝鮮半島南部、中国華南、雲南地方、東南アジア山岳部を通り、ネパールに至る領域に成立する森林。
 - ミカン、お茶など、日本人の食生活と深く結びついている作物も照葉樹林を構成する樹種

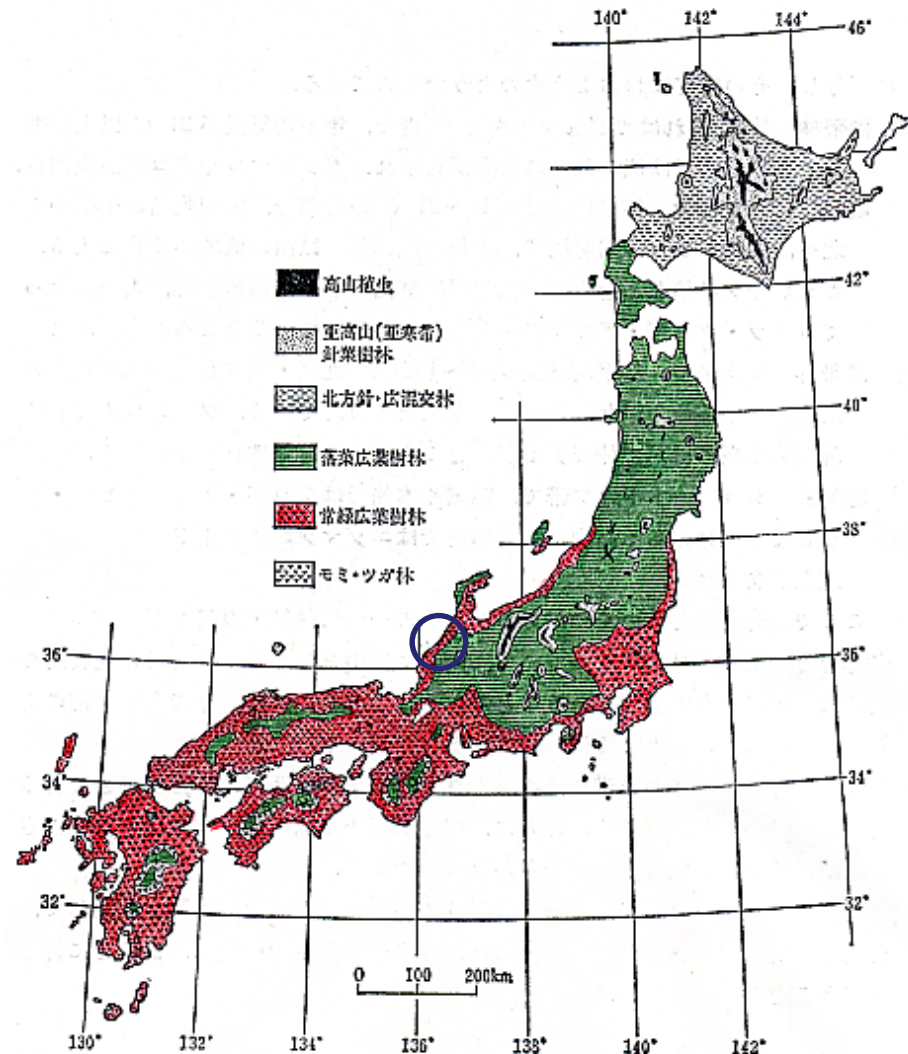


落葉広葉樹

- **一年のある時期，葉を落とす時期がある樹種**
 - 夏に葉を着ける「夏緑林」・・・日本はこのタイプ
 - 雨期に葉を着ける「雨緑林」・・・チーク，ユーカリなど
- **落葉する理由**
 - 温度・湿度のいずれかが不足することにより，光合成ができない時期が存在する.
 - 葉を維持するためにはエネルギーを消耗するため，葉を落とすことにより，エネルギーの消耗を抑制する.
 - 新葉の方が古い葉よりも光合成の効率がよい.

照葉樹林と落葉広葉樹林の境界は？

- 南西日本と関東平野，日本海岸・太平洋岸の暖流が通っているところが，温暖なので照葉樹林となる。
- 東北日本，渡島半島，中部日本の内陸部および紀伊半島・中国・四国・九州の山地が落葉広葉樹林となる。
- この境界線はどのように決まっているのか？

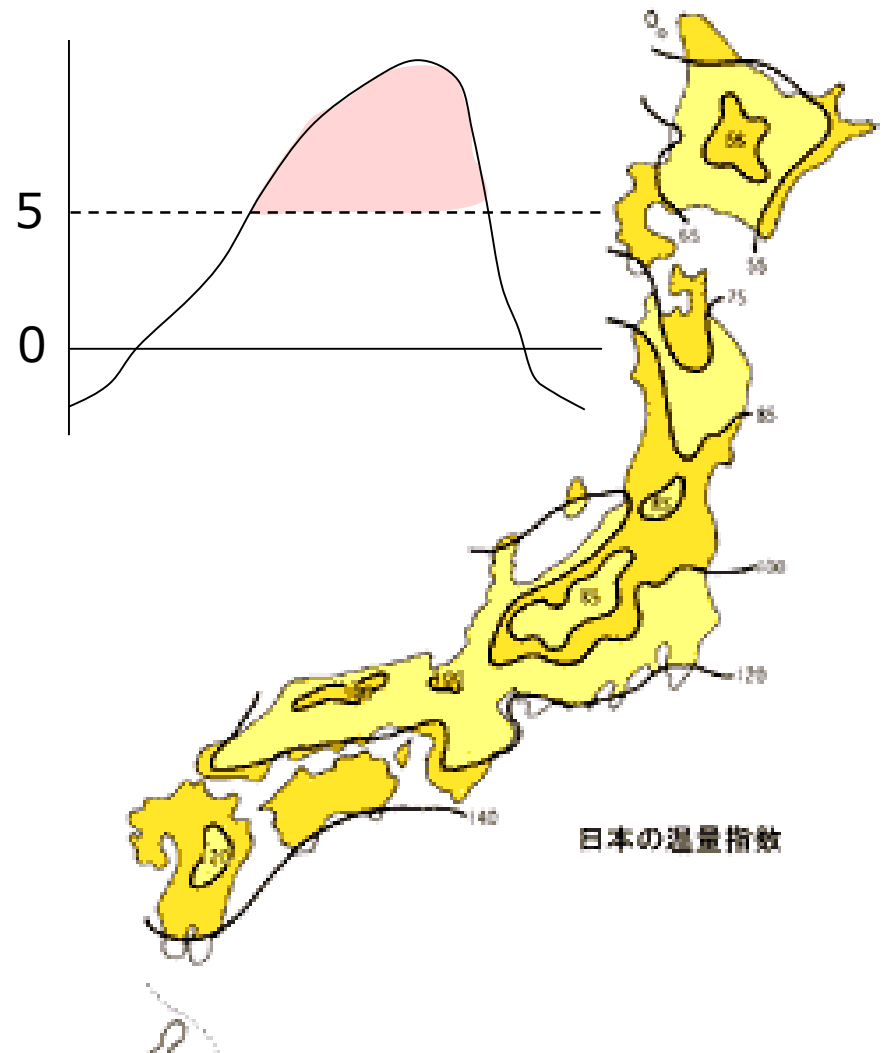


植生分布を決める要因

- 日本はモンスーン地帯なので、十分な降水量がある。そのため、温度条件で植生分布が決定する。
- 冬はある程度気温が下がっても、植物の分布には大きく影響しない。
 - 冬は活動を停止することができる。光合成を行うことができない。
- そのため、夏（＝植物の成長期、活動期）の温度分布が植生の分布に影響する。
 - 夏の間にとどれくらい光合成をすることができるか？

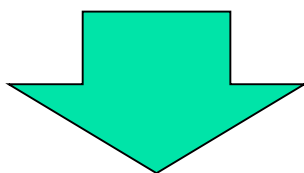
温量指数という考え方

- 植物が活発に活動を行う温度がだいたい $+5^{\circ}\text{C}$.
- 5°C を越える「活動期」の温度環境が重要.
- 月平均気温 5°C 以上の温度を積算する.
- この値を「温量指数」と言い、日本の植生分布と良く対応する.
 - 180~85 : 照葉樹林
 - 85~45 : 落葉広葉樹林
 - 45~15 : 常緑針葉樹林



文化圏

- それぞれの森林が分布する範囲には、共通した食べ物，飲み物を持つ文化が広がっている。
- 森林（と，それに対応した自然環境）に依存した文化の存在



照葉樹林文化
ブナ帯文化

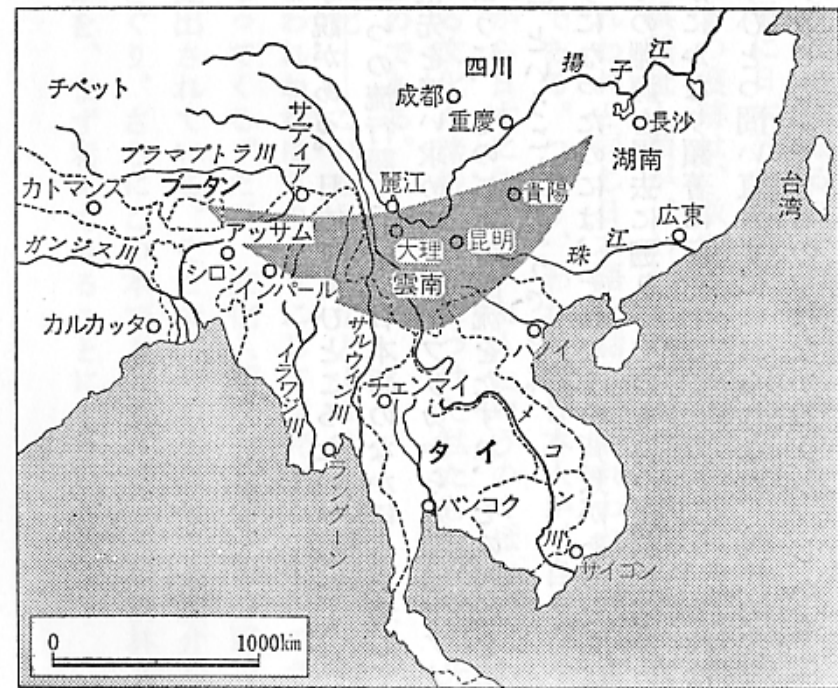


図3-8 東・南アジアの植生帯

日本列島の照葉樹林帯は中国南部にまで連続し、これらの地域に文化的共通性を生んでいる。吉良原図，佐々木（1971）による。

照葉樹林文化論の提唱

- 日本文化（特に西日本に多く見られる文化）の源流（基層文化）が照葉樹林帯の「照葉樹林文化」にあるとする考え方
 - 京都大学の中尾佐助，佐々木高明によって提唱
- 雲南省を中心とする地域に照葉樹林文化のセンター「東亜半月弧」がある
 - 日本の文化は南～東アジアの広い地域に広がる文化帯の一部として存在する



照葉樹林文化のセンター《東亜半月弧》

メソポタミア文明を生み出した
「肥沃な三日月地帯」に対置した

石川の照葉樹林



気多大社の「入らずの森」
(羽咋市)



鹿島の森
(加賀市)

共通の文化要素 お茶

- 日本では西日本（照葉樹林帯）で多く飲用される。
- 照葉樹林帯の国々の多くで利用されている。
 - 食用の場合も多い
- もともと原産地は雲南省（照葉樹林帯）にある。

表Ⅲ-6 東南アジア北部山地における茶の加工・利用形態のさまざま

		加熱処理	発酵処理	事例	展開型
濡った食べる茶	噛み茶(ミエン) 食べ茶(ラベソウ)	生葉	大穴に漬け込む (大量生産用)	[タイ族]	搗き固める・乾す 固形茶 (礬石茶)
			大型竹籠につめ込む (非発酵ミエンもつくる)	[タイ族]	
			大型竹籠・土中に埋める	[カム一族]	
			むす(長時間)		
湿らす	竹筒・土中に埋める	[ラメット族]			
湯につける	もむ → 竹筒・土中に埋める	[ビルマ西部]			
	もむ → 竹籠・土中に埋める	[バラウン族]			
むす(短時間)	もむ → 大穴に漬け込む	[バラウン族]			
乾いた飲む茶	生葉	あふる	湯を注ぐ	[北ラオス・ヤオ族]	くだく 湯を注ぐ
		いる	竹筒に貯える → 砕いて煮る	[北ビルマ・カチン族]	
				[ベトナム北部・山地民]	
		湯につける			
		むす	日に乾す → もむ → 湯を注ぐ	[ビルマ・シャン州]	
いる		[その他]			

共通の文化要素 漆

- 漆器 = japan
- 現在、もっとも漆器を利用しているのはブータンの人々とも
 - 普段、my碗を持ち歩く
- ベトナム、ミャンマー、タイ、ラオスなどの国々でも、古くは多くの漆器を生産していた
- 漆の原産地も雲南省
- 漆は乾燥させる際に湿気を必要とする（漆を酸化させるため）
 - 湿気が多いモンスーン地帯 = 照葉樹林帯が適している

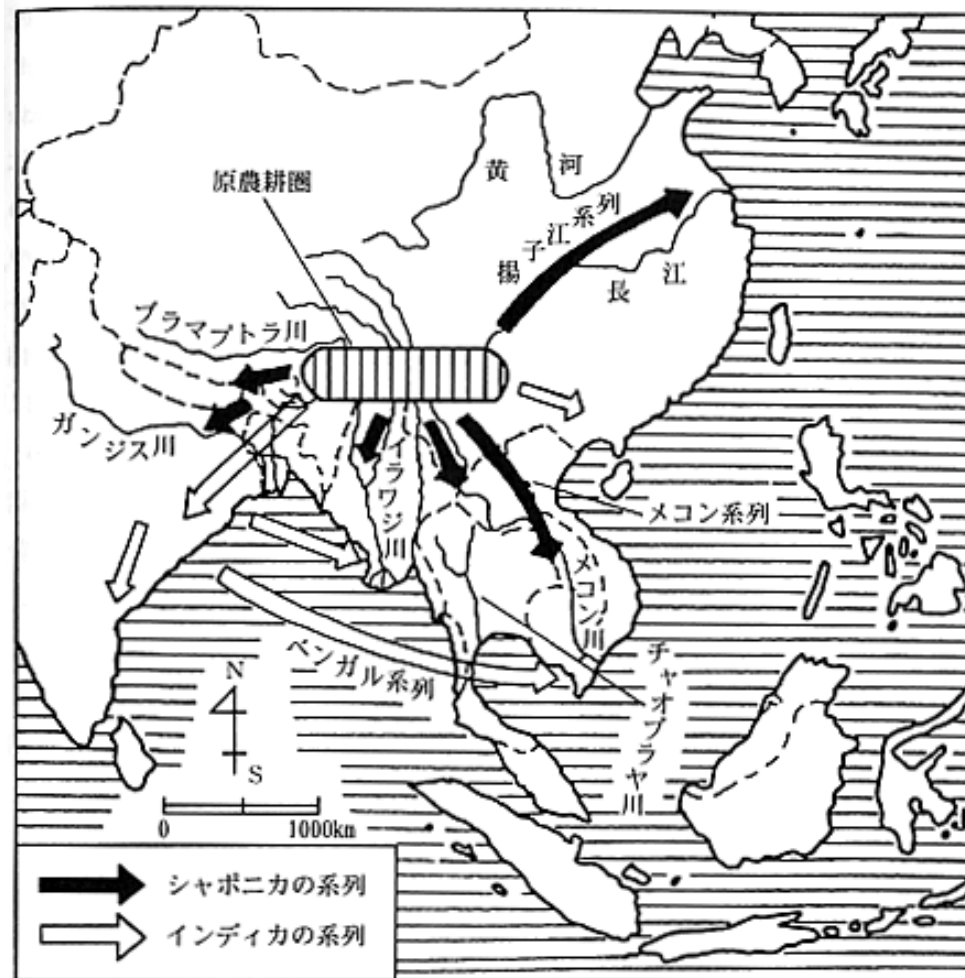
ベトナム漆器



ミャンマー漆器

稲はどこから？

- イネの原産地も「東亜半月弧」の中心部である中国南部
- 焼畑で栽培される雑穀の一つであった。
- 稲作の拡大当初は、粘り気の強いジャポニカ種（短粒米）がインディカ種（長粒米）よりも普及
 - モチを好む文化
 - インディカ種は「非」照葉樹林帯であるインドに拡大。インドから東南アジアに再拡大



第6図 アジア大陸におけるイネの道

(波部忠世, 1977: 214, VIII-4図を一部修正して作成)

イネの性質

- もともと中国南部の高温な地域の原産であるため、成長に大量の熱量を必要とする。
 - 東南アジア地方などでは二期作が可能・・・連作障害がない作物！
 - 日本では九州，四国などの一部のみで可能（ほとんどやってない）
- 日本は稲の分布の北限地域になる
 - 夏季の気温が低くなると，日本は冷害になりやすい

ベトナムの二期作の風景

田植えをしている向こうに実っている稲，手前には成長途中の稲

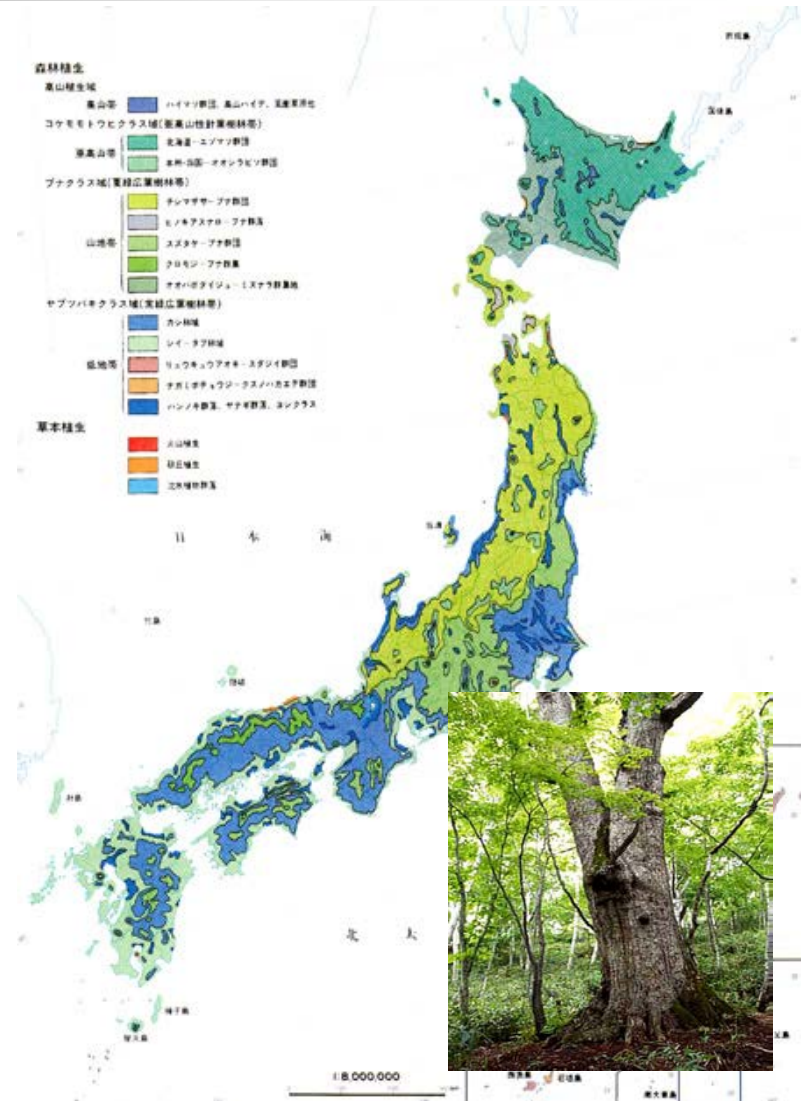


稲作の急速な拡大

- **弥生時代（紀元前10世紀ころ）にはいると、日本列島の西半分に稲作が普及する（約500年かかった）。**
 - 放射性炭素年代測定法による成果
- **稲作に先行する農耕技術があったことが、稲作を比較的容易に受容させる技術的基盤になったと考えられる。**
 - 照葉樹林文化に基盤を置く縄文文化（焼畑農耕）が存在していたことが、稲作の受容に繋がる。
 - 縄文時代から弥生時代に入って気候が寒冷化し、沖積低地が広がったことが、稲作の拡大に有利であった。
- **東日本には稲作はなかなか普及しなかった。**
 - 北海道には基本的に弥生文化が到達していない＝続縄文文化
 - **なぜ？**

縄文文化を支えた森

- 東北日本は、夏季の温度が低い
ため**落葉広葉樹林帯**となる。
- 中部～東北ではブナを主体とした「ブナ林」、北海道では針葉樹林とミズナラが混生する「針広混交林」が成立。
 - 白神山地のブナ林は世界自然遺産に指定され有名。
- この森が縄文時代の文化を支えた。



東アジア全体の視点で

- 照葉樹林文化は南アジアに広く広がる森林帯である照葉樹林帯に共通する文化であった。
- 東北日本の縄文文化を支えた「ブナ林」の広がりとは？
- ブナは日本には多いが、東アジア全体では少ない。
 - 日本列島は多雪・多雨であるのでブナが多くなるが、中国東北部は乾燥しているためブナには不適である。
- 東アジア全体は落葉広葉樹林帯<ナラ林帯>と位置づけられる。

図6-11 東アジアにおけるナラ林の分布



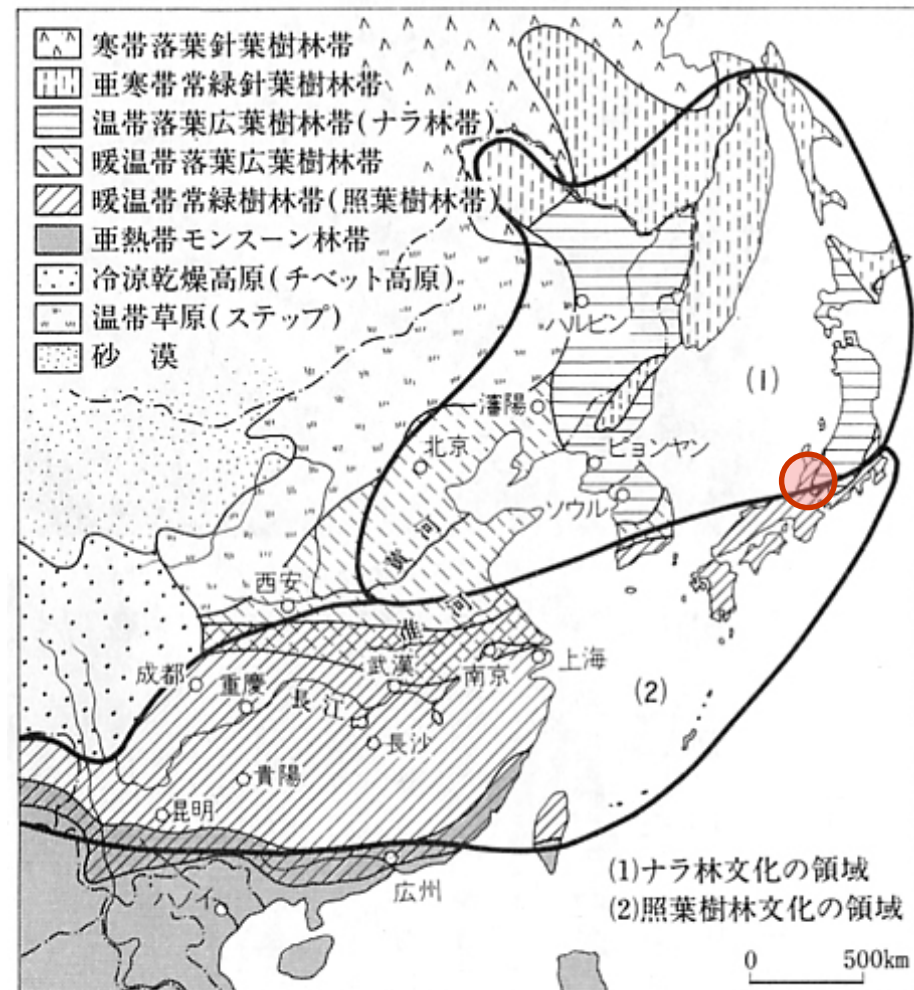
日本列島の東北部に分布するミズナラ林と朝鮮半島・中国東北部に分布するモンゴリナラ林はきわめてよく似た森林である。

落葉広葉樹林帯の文化

= ブナ帯文化・ナラ林文化論

- 日本のブナ = ミズナラ混交林帯を含む東アジア地域のナラ林帯には共通の文化要素 = **ナラ林文化** = が広がっている。
- 日本列島のブナ = ミズナラ混交林帯に広がる <縄文文化> は、このナラ林文化の一つと考えられる。
- **ブナ帯文化 と ナラ林文化**
 - この段階では同じものと考えて良い。どちらのタームを使うのも可。
 - 照葉樹林文化との対比としてはナラ林文化という言葉。日本文化を重視する際には**ブナ帯文化**という言葉を使う方が適切。

図 2-1 東アジアの植生とナラ林文化・照葉樹林文化の領域



日本のナラ林 = ミズナラ



落葉広葉樹林（ブナ・ナラ林）の恵み

- **本格的な農耕が始まる以前の縄文時代では，狩猟・採集が食料の獲得の重要な部分を占める**
 - 照葉樹林文化圏でも，縄文時代は焼き畑まで。
- **落葉広葉樹林は，照葉樹林に比べ森の恵みが豊か**
 - 木の実・キノコ，動物，土壌
- **落葉広葉樹林帯は川の恵みも豊か**
 - サケ・マス



森の恵み：木の実

■ 照葉樹林のドングリ

- 特にカシ類はタンニンという有毒成分を含んでいるためそのままでは食用にできず、水さらしによる灰汁抜きが必要。
- そのまま食用になるのはシイの実くらい。

■ ブナ・ナラ林のドングリ

- ブナ・ヤマグリ・クルミは灰汁抜きの必要がない。しかも生産量が多く、実のサイズが大きい。
- ミズナラ・トチは灰汁抜きのため火入れ＋水さらし処理が必要だが、実のサイズが大きいいため大量のデンプン質を確保することができる。

三内丸山遺跡から出た木の実

- ヤマクリ, オニグルミ, トチノミなどが多く発掘された。
- 中でも、ヤマグリが大量に出土。安定的な収穫があったと考えられる。また、遺伝的類似性が高いことから、特に美味しい木を選び**半栽培状態で管理**していたことも予想される。
- このほかに、エゴマ、ヒョウタンや豆類も出土している。



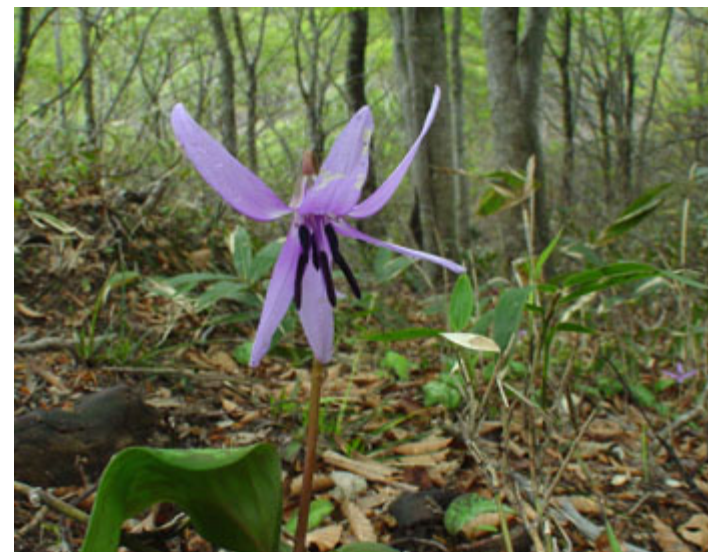
トチの実

- トチ餅などにして食す
- 実が大きく、保存が利く。冷害の時にも確実に実を付けるため救荒作物として重要。
- 東北地方では、明治時代になるまで女の子が家に生まれると持ち山にトチノキを植え、嫁入りの時にその木の権利を持たせた。里帰りの際に実を集めて蓄えることが嫁の勤め。
- エグ味成分のサポニン、アポインは非水溶性なので、火入れをする高度な技術が必要。



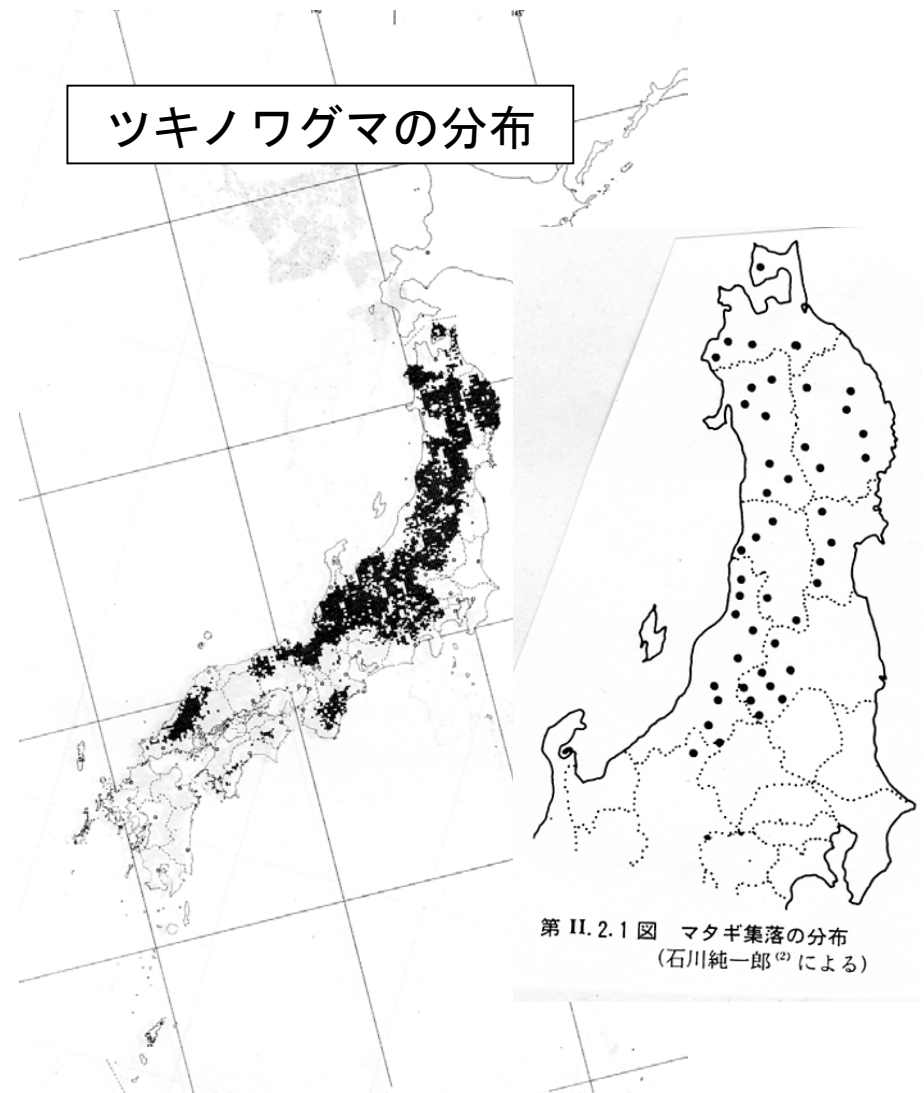
山菜類など

- ブナ林は落葉樹であるため、展葉前には林床まで明かりが届く。
 - 明かりが届く春先には、林床に様々な植物が芽吹く。
 - その中にはカタクリ、ゼンマイ、ウバユリ、アセビなどの食用になる植物が多く含まれる。
 - キノコ類も多く産する。
-
- 一方、照葉樹林は一年中林冠が閉塞されているため林床が暗く、下層植生に乏しくなる。



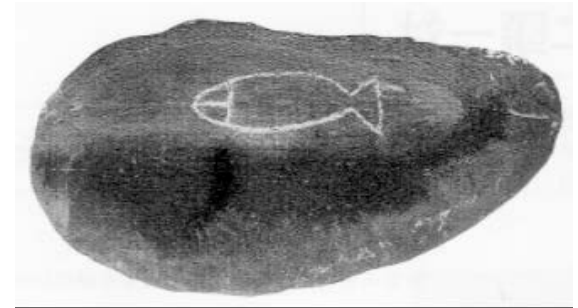
野生生物

- **陸上の野生生物も、照葉樹林帯に比べ豊か。**
 - ブナ林：クマ、ニホンカモシカ
 - 照葉樹林：ニホンザル、イノシシ
 - 両方：タヌキ、キツネ、シカ
- **ブナ帯では狩猟が盛んに行われた。**
 - マタギと呼ばれる職業的狩猟民が存在。



川の恵み

- 東北～北海道の沿岸には、毎年サケ・マスが大量に遡上
- サケは主として秋季～冬季，マスは春季～秋季が主たる猟期となるため，端境期があまりない。漁獲量も年を通じて安定。
- 亀ヶ岡式文化は「サケ・マス文化」であるとする説もある。
- 東北地方における「鮭石」の発見やアイヌ民族が鮭を神の魚（カムイ・チエプ）としていることから、東北・北海道地方で重要な食料であったことがわかる。神として扱うことで資源を保護する。



秋田県矢島町の縄文中期の遺跡から出土した「鮭石」

サケ・マス

- 寒流系の漁種
- 川で孵化の後，降海．3～4年の間 北洋で回遊した後に母川に回帰する．
- 川に遡上するため捕獲が容易．

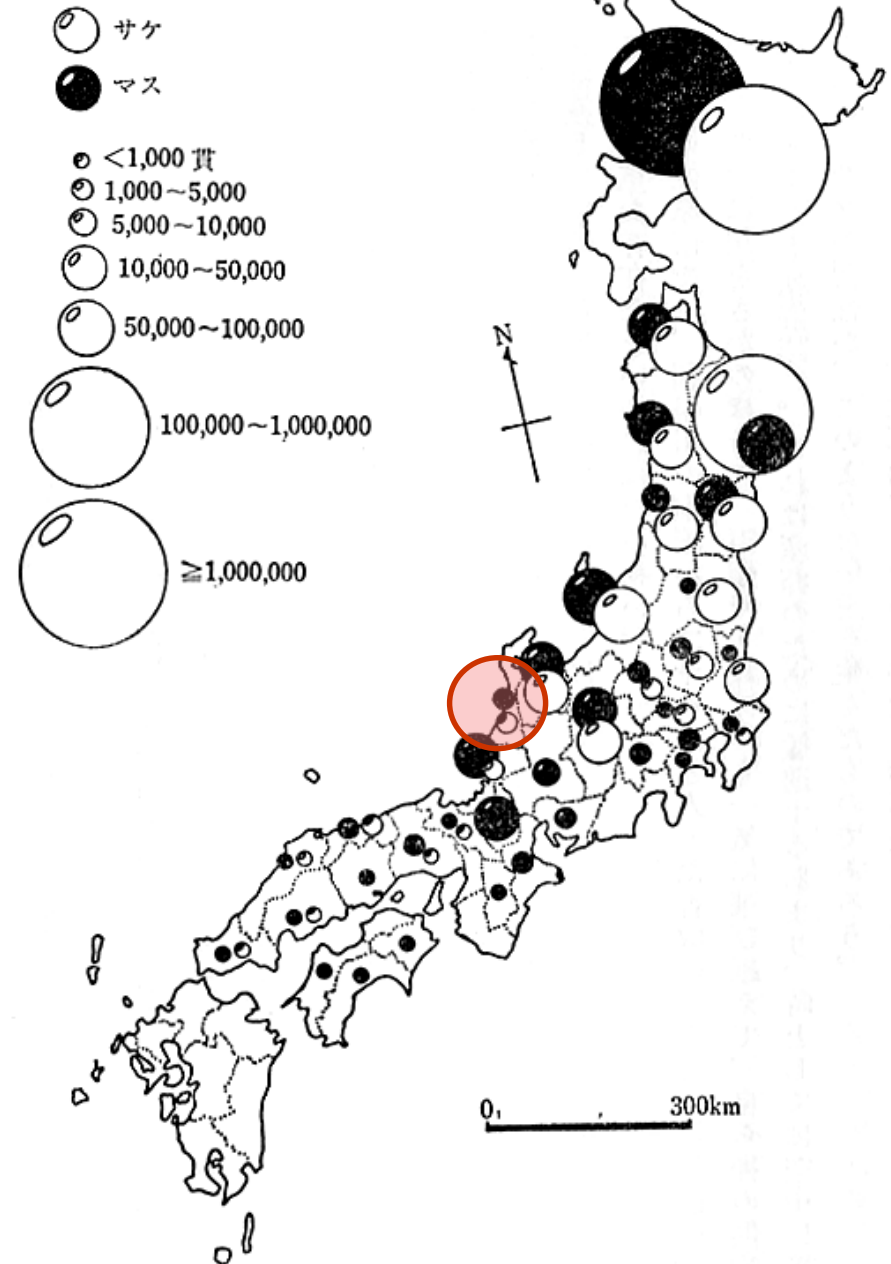


図5 昭和初期における道府県別サケ・マス漁獲量
(昭和8年) (農林省水産統計により作成)

鮭皮を利用する文化

- 東アジアの沿岸地域に住んでいた人々は、漁労と採集を中心とした生活を営んでいた。
- 鮭の皮を使って靴を作ったり、服を作ったりする文化（鮭を様々な利用する文化）は東アジアに共通の文化。



北からの文化の流れ

- 旧石器時代から，北からの文化の流れがあったことがわかる。
- 縄文時代，弥生時代に入っても東西の文化の差異が認められる。

図6-9 縄文時代晩期から弥生時代初期の土器の分布図（土器型式の分布は鎌木義昌による。ただし亀ヶ岡文化圏・突帯文文化圏の名称は佐々木が記入した）

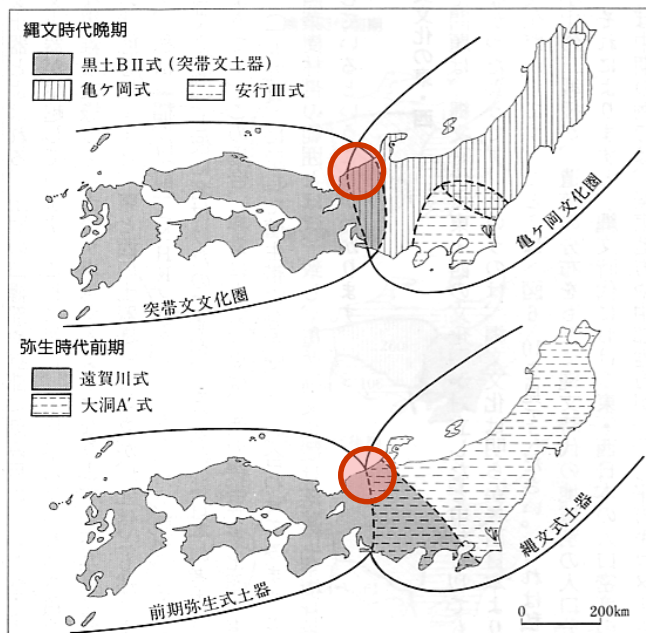
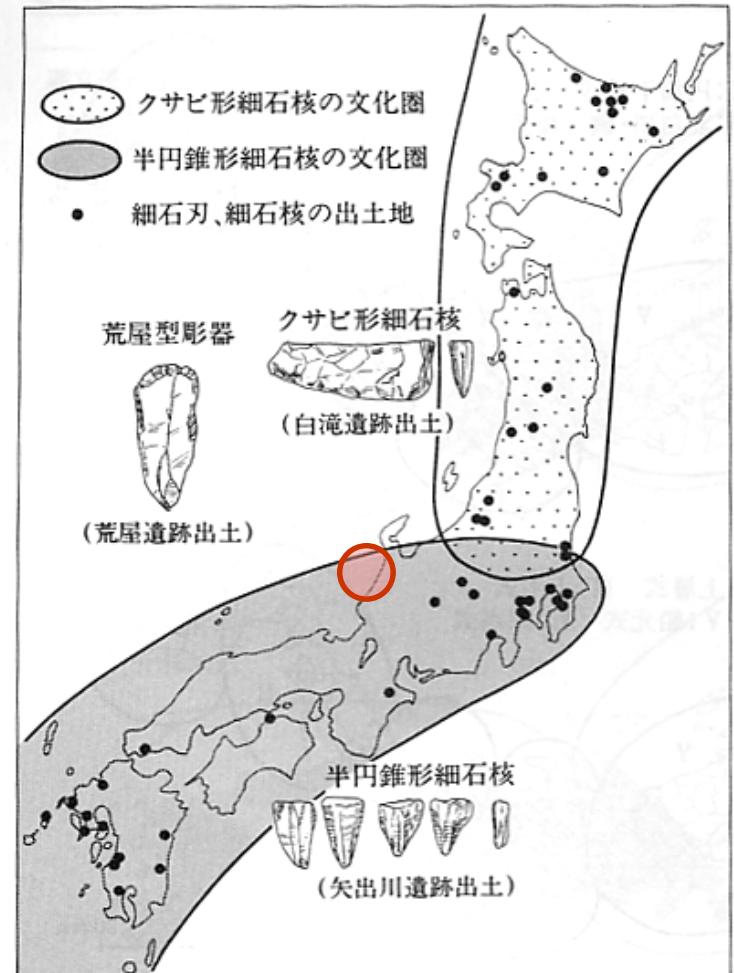


図6-7 細石刃文化の東と西（小田静夫、1986 による）



ブナ帯文化・ナラ林文化を理解する

- 木の実などの採集，野生動物・魚類などの狩猟，焼き畑による農耕のいずれの面に於いても，東日本のブナ帯における文化複合が西日本の照葉樹林帯のそれを上回る。
 - 縄文時代では，東日本が人口，遺跡数とも上回っていることもこれを支持する。
 - 弥生時代になっても，非効率な稲作をする必要がなかった
- これらブナ林（東アジア的にはナラ林）の自然に依存して成立した文化複合を〈ブナ帯文化・ナラ林文化〉と呼ぶ。
 - お取り寄せのヒスイのペンダントをして，クマの毛皮に座り，サケの薫製をつまみに，ヤマブドウのワインを呑みながら，火炎土器のデザインを考える人々の文化。



本日のまとめ

- ◆ 日本列島の基層文化は、南方からの照葉樹林文化に起源をもつ西日本中心の文化と、北方からのブナ帯文化に起源をもつ東日本中心の文化から成り立っている。
- ◆ 世界的な気候分布における日本の気候特性が、東西で異なる森林を成立させ、それぞれの森林とその環境に依存した文化を成立させたといえる。
- ◆ これらの文化は、現在の日本の生活文化や日本人の形態の中にも残されており、「日本らしさ」はこれらの複合体であると理解できる。
- ◆ 石川県を含む北陸地方は、この東西の境界線上に位置している。これが、北陸地方の多様な生活環境の基盤となっている（→1コマ目, 2コマ目を振り返ろう）



今後のスケジュール

- **1月08日：休講**

- **1月15日（第12回）：世界の中の北陸地方**
 - **－地球温暖化現象の石川県への影響－**

- **1月22日（第13回）：北陸の地震災害**
 - **－能登半島地震と東日本大震災－**

- **1月29日は試験じゃなくて・・・**

- **2月05日：期末試験**